

当館収蔵古文書の利用状況

俵谷和子 (当館嘱託)

はじめに

当市内の古文書*収集・整理状況については、大崎正雄氏が『郷土資料館ニュース』8号(1991.1刊)同19号(1996.3刊)で詳しく報告している。本報告は、これら古文書が当館に収蔵された後、どのような利用がなされているのか現況を紹介するものである*。

1. 当館所蔵古文書の特色

大崎氏が(前掲稿)記すとおり、当館で収蔵している古文書の大半は昭和42年に完結した『西宮市史』全8巻の編纂事業の中で確認されたものである。そしてこれら古文書は、「西宮市史編集資料目録第1集～第17集及び番外編1～3」(以下「資料目録」とする)によってまとめられている。その後収集・整理された古文書については、基本的に仮目録を作成し旧蔵者に受託の書類と共にこれをお渡している。しかし、仮目録の段階では内部資料に止まり、これらの古文書の内容は広く一般には公表されていない。ただし、資料の利用請求があった場合は、他の古文書と同様に利用することが可能である。

以上のような点から、資料館に利用申請される古文書は、『西宮市史』の資料編で翻刻されているもの、もしくは「資料目録」に記載されている古文書がほとんどである。

2. 利用される古文書の傾向

当館で収蔵している古文書は、数点を除いて近世・近代・現代文書である。当館収蔵で利用された古文書については(表1)、現地で保管されている古文書で利用のあったものについては割愛した。

最も利用請求が多かったのは「中島直行氏文書」、次いで「中村敏雄氏文書」、「岡本俊

二氏文書」(以上指定文化財)、「西宮市役所所蔵文書」、「西宮市役所架蔵文書」、「前田昭氏文書」、「日下萬之助氏文書」、「鳴尾支所文書」等が続く。少し細かいがそれぞれの文書群の特色を記しておく。

中島家・中村家の古文書は「下大市文書」として一括で市の指定を受けている。一村の村況が長期間にわたって知ることができ、関心の高い百間樋用水や仁川用水などの古文書を多く含んでいる。

岡本家は、近世初頭から明治にいたるまで代々大庄屋を勤めた家で、尼崎藩政や近世の農業経営を知ることのできる資料を含み、また研究者のみならず一般にもよく知られた資料である。

「日下萬之助氏文書」・「鳴尾支所文書」は、後述する展示(平成12年度特別展)による効果での利用頻度が高くなった。

利用者としては、学術研究者(大学生・院生も含む)が大半であり(表2)、その他近隣の市・県史編纂室や近隣の博物館である。従って利用のされ方は、研究目的の写真撮影・熟覧が最も多く、その他は「資料集」「解説書」等への転載のための写真貸与や展示資料としての館外貸し出しということになる(表3・4)。

3. 展示

前述したように、「資料目録」以外の古文書の内容については、一般の目に触れる機会が少ない。従って内容を公開するためには、正式目録を早急に作成することも必要ではあるが、郷土資料館としては展示という方法で資料を市民に紹介してきた。例えば、平成11・12年度の「企画陳列」、平成12年度の「特別展」、平成13年度の「特集展示」などがそれである。いずれの展示でも市民の古文書への関心は高く、特に平成12年度特別展「古地図大観」では、会期終了後の特別利用が相次いだ。また、平成13年度の特集展示「百間樋訴訟記録～元禄六年新樋建設をめぐる百間樋組内紛一件～」では広報に不備があったものの、会期当初から内容に関する多くの質問が寄せられ百間樋への関心の高さを実感した。

まとめ

当館は、「公文書館」のように文書資料の閲覧を主目的としない施設であるが、収蔵している資料を広く知っていただく必要はあると考えている。この点から収蔵の現況を何らかのまとめた形(目録等)で提示していかなければならない。また、利用請求の多い「資料目録」の文書も市史の編纂事業が完結してから長期間が経ち、その間に散逸してしまった古文書を含んでいるという問題もある。早急にこの点も含めた現況を提示し、利用者が

資料活用しやすいような手段を考えていかねばならない。

なお、今後も展示という手段での資料公開を続けて実施していく予定である。

*本報告で「古文書（こもんじょ）」としているのは、「文献資料」とされるものを指している。

*本報告に基づくデータは、平成9年4月から平成13年12月のものである。

文書名	年 度					
	9	10	11	12	13	合計
中島直行氏文書*1*2	0	2	3	2	4	11
中村敏雄氏文書*1*2	0	4	2	2	1	9
岡本俊二氏文書*1*2	1	2	1	1	1	6
上大市部落有文書*1	0	1	1	1	2	5
西宮市役所所蔵文書*1	0	0	1	4	0	5
西宮市役所架蔵文書*1	0	0	1	4	0	5
前田昭氏文書	0	0	0	2	2	4
日下萬之助氏文書*1	0	0	0	3	1	4
鳴尾支所文書*1	0	0	0	4	0	4
高木部落有文書*1	0	2	1	1	0	4
鳥飼よね氏文書*1*2	1	0	1	0	1	3
大村太右衛門氏文書*1	0	1	1	0	0	2
葛馬邦彦氏文書	1	0	0	1	0	2
田原勇氏文書*1	0	0	1	1	0	2
覚心酒造家文書	0	0	1	1	0	2
甲山山論絵図	0	0	0	2	0	2
豊臣氏裁許状*2	0	0	1	0	1	2
西宮町細見図(複製)	0	1	0	1	0	2
磯野与治右衛門氏文書*1	0	1	0	0	0	1
越木岩新田文書	0	1	0	0	0	1
守舎新兵衛氏文書*1	0	0	0	1	0	1
阪口吉蔵氏文書	0	0	0	1	0	1
覚心半左右衛門氏文書	0	0	1	0	0	1
辰半中店史料	0	0	0	1	0	1
川合茂兵衛氏文書*1	0	0	0	0	1	1
樋口市右衛門氏文書*1	0	0	0	0	1	1
吉村繁松氏文書*1	0	0	0	0	1	1
前田玄以書状*2	0	0	0	0	1	1
株元治作氏文書*1	0	0	0	0	1	1
瓦林貞雄氏文書*1	0	0	0	0	1	1
松井家文書	0	0	0	1	0	1
田富哲蔵氏文書	0	0	0	1	0	1
辰馬外一郎氏文書*1	0	0	1	0	0	1
席松昌純氏文書	0	0	0	0	1	1
宗門帳*1	0	0	0	1	0	1
計	4	15	17	36	20	92

表1 資料館収蔵古文書利用一覧 (平成13年12月末現在)

*1 西宮市史編集資料目録集掲載分 *2 指定文化財

利用者	年 度					
	9	10	11	12	13	合計
研究者	0	0	1	2	1	4
大学院生	1	1	3	1	0	6
大学生	0	1	0	1	2	4
社寺	0	0	1	1	0	2
行政・博物館	1	3	3	2	4	13
企業	1	1	0	1	0	3
一般	0	1	1	0	3	5
その他	0	1	0	5	0	6
計	3	8	9	13	10	43

表2 利用者一覧

利用区分	年 度					
	9	10	11	12	13	合計
写真撮影・熱覧	2	4	5	6	5	22
館外貸出	0	1	0	2	0	3
紙焼付与	0	0	1	4	0	5
テレビ撮影	0	0	0	0	1	1
複写	0	0	1	0	0	1
その他	1	2	2	1	3	9
計	3	7	9	13	9	42
利用せず	0	1	1	1	0	3

表3 資料の利用区分一覧

利用目的	年 度					
	9	10	11	12	13	合計
調査	1	2	4	2	4	13
研究	1	2	2	3	3	11
転載	0	2	1	2	0	5
展示	0	1	1	3	2	7
その他・不明	1	0	0	3	1	5
計	3	7	8	13	10	41
利用せず	0	1	1	1	0	3

表4 資料の利用目的一覧

さがしもののたびにでよう！（下）

—小学校3年生向けプログラムの試み—

宮原 彩（当館囑託）

3. 仕掛けて、大漁！

a. 演示解説

1月の企画陳列は、「仕掛けて、大漁！」というテーマで、西宮で使われていたタコツボ・モンドリ・カニカゴ・生簀・びくなどの漁具を展示する。まず、演示解説に使う「3年生キット」の中身を検討した。魚が捕れる仕組みを説明するには、タコツボ・モンドリ・カニカゴが適切だと思われるが、タコツボは材質がもろくなっており、損傷の恐れがあるため実演には向かない。カニカゴは大きすぎるためこれもまた実演には向かない。ということで、モンドリがキットに選ばれた。モンドリの中でも西宮に多い形であるトックリ形のものを使用することとする。企画陳列では岡本家旧蔵資料群を大量に展示するが、キットのものは同型の他家旧蔵資料群の中からひとつピックアップした。このモンドリではアナゴが捕れるのであるが、その様子をより分かりやすく説明するため、ぬいぐるみがあれば良いということになった。そこでアナゴだけでなくタコ・カニのぬいぐるみも探すことにした。大阪市の海遊館のミュージアムショップにならあるのではないかと探しに行ったが、タコ・カニのかわいらしいぬいぐるみはあったが、アナゴはどうにも見つからなかった。アナゴに似たウツボがあったので、アナゴに改良して使おうということになった。のこぎりのような歯を切り、大きく開けた口を縫い閉じ、フェルトでひれをつけたら、少しアナゴらしくなった。しかし、体全体にある斑点と、頭が妙に大きいことから、どうしても不気味なものになる。その後、アナゴの生態を見ようと出掛けた神戸市須磨区の海浜水族園で本物のアナゴを見た後では、どうしてもそのウツボはアナゴには見えなくなってしまい、使用するのを断念した。そうして、年末年始の休み中に、一から手作りすることにした。本物のアナゴを見ているのでぬいぐるみの出来上がりイメージはしやすく、かなり近い形のものを作ることができた。モンドリの口のサイズと、ぬいぐるみの直径がぴったりだったので、上手く演示解説で使うことができた。

小学生を前にしての解説では、モンドリとアナゴを見せ、まずどうやって捕るのか、とったアナゴをどうやって取り出すのかを考えてもらった。ひと通りの意見が出たところで、

実際にはどのようにアナゴが取れるのかを示す。この方法により、モンドリでアナゴを捕る仕組みがビジュアル的に理解でき、印象に残ったようだった。

b. ワークブック第1弾

キットと並行してワークブック作成にも取りかかった。最近の子どもたちはゲームに囲まれて育っているため、そうしたゲーム感覚を取り入れたものを作ろうという話になった。勉強の一環としてのワークシートだと、どうしても堅苦しい難しいものになりがちであるが、そのようなものではなく、あくまでも「楽しく学ぶ」方向で行きたいと考えた。最初に考えたのが、常設展示と企画陳列、両方とも見てもらえるような仕組みである。ワークブックには常設展示に関する問題を挙げ、それを解いて展示室の中を探すと、企画陳列に関する問題を書いた「しれいしょ」がある、という仕組みである。例えば、ワークブックには「西宮の名塩では昔、〇〇が名産だった。〇〇って何？」という問題があり、子供たちは常設展示室で「紙漉き」のコーナーを探す。そうすると、そのコーナーには「しれいしょ」がぶら下がっている。「しれいしょ」には、タコの絵が描いてあり、「タコをとるための道具はどれだ？探してみよう」という指令が書いてある。そこで子供たちは企画陳列として展示されているタコツボを探し、タコツボが見つければワークブックの答え欄に「タコツボ」と記入するのである。

しかし、これは小学生には少々難しかった。「しれいしょ」を探す、さらに「もの」を探す、という2段階の作業が必要になると、小学校3年生には理解が難しかったようである。第1回目の小学校で行なったところ、ワークブックの仕組みが理解できて時間内（約20分間）に問題が解けた子は全体の約1/3、ワークブックのやり方を側で口頭によって説明したら理解して取り組んだ子が約1/3、なかなか理解できず時間内に全部は解けなかった子が約1/3だった。団体見学後の館内反省会では、やはり2段階では無理だということと、ワークブックは全員ができて帰ってもらうようであればならない、という話になり、改訂版を急ぎ作成することになった。

c. ワークブック改訂版

改訂版のワークブックでは、問題を簡略化し、タコの絵を描いて「これをとるための道具はどれだ？」という形のものにした。解答欄には「たこつぼ」と書くことになる。また、小学生に分かりやすいヒントを、ということで「注目マーク」を作り、それを展示室の小中学生向けキャプションの側に貼ることにした。赤く目立つマークなので、小学生にも見つけやすい。それを頼りに問題の答えを探してもらうことにした。これで幾分、解答に要す

る時間の短縮につながった。ただし、問題の数だけ注目マークをつけるのも簡単すぎるので、問題に出てこない展示物にも注目マークをつけ、「ヒントは注目マークです。これを頼りに探してね。でも、注目マークだけ見ても解けないよ。惑わされないようにね」と説明してからワークブックを配布した。

ワークブックの問題改訂と注目マークとで、時間内に全員が問題を解けるようになった。それでも多少は幅が出てくる。ゆっくりする子で時間いっぱい、早い子は5分少々ですべて解答できた。早くできた子には、「なんでタコツボでタコがとれるのかなあ?」「カニを捕るためのえさは、何やった?」「モンドリって材料なにでできてる?」と話し掛け、もう一度じっくりものを見たり、キャプションを読むように仕向けた。そうしたことで、ワークブックにかかる時間の差があっても、全員時間を持て余すことはなかった。

d. ぼうけんのあかし

問題がすべてできた子ども達には、「ぼうけんのあかし」が渡される。今回の団体見学では時間の制限があったため、一括して先生にお渡しして、学校に帰ってから配ってもらうことにした。「ぼうけんのあかし」の表はカラフルな賞状風で、裏は問題の答えを印刷した。平成13年3月に行なわれた兵庫県博物館協会の研修「ワークシートの活用」における議論でも、ワークシートをして終わりというのではなくその後になにか収穫があるほうが子ども達には励みになるという意見が多く出ていた。その点でいうと、当館での「ぼうけんのあかし」は良い形式のものが作れていたと思う。「ぼうけんのあかし」は、がんばる励みになったようで、児童・先生ともに好評であった。

e. 反応

「仕掛けて、大漁!」のワークブックは、下見に来られる段階から、先生方に好評であった。子ども達もワークブックを配布するとさっそく名前を書き、展示室へと散っていった。熱心に道具を見て考え、ワークブックに記入する。とても真剣なまなざしで展示物を見つめ、時には絵を描いたり、気がついたことをメモする姿も見られた。終了後の反応も良く、「すごいもんがいっぱいあるねんなあ」「楽しかった」「また郷土資料館に来るね」と言いつつ館を後にしてくれ、郷土資料館に行くと面白いものがある、ということを知ってもらうことはできたようである。「仕掛けて、大漁!」は好評裡に終了した。

4. 男の装い

a. プログラム第2弾

「仕掛けて、大漁！」が好評であり、ワークブックの完成度も高かったため、次の「男の装い」は頭を悩ませることになった。

まず、ワークブックの問題設定が難しくなった。前は「これをとる道具をさがせ！」という問題が出せたが、今度は男物の衣服・帽子・小物だったため、ありがちな問題になりそうで困った。なるべくならキャプションを見るだけで物の名前を答えさせるという安易なものにはしたくないという考えであった。色々案を出しあった結果、「今はこれ、むかしは〇〇」という形の設問にすることになった。これは結果として、3学期で学習する「郷土学習」のうち、「昔の暮らしを知ろう」という学習に合い、先生方からも喜ばれた。演示解説では、折り畳みシルクハットを用いることになった。折り畳みシルクハットは、皮製の変った形のケースに入っている。箱から取り出すと、平べったい形で、とても帽子には見えない。それを静かに机に置いて両脇を持ち上げると、ばねの力で勢いよく開く。これは、大人が見ても驚きがあるので、子ども達にはインパクトが大きいであろうと、即、決定した。皮の痛みや帽子の保存状態から、演示解説の仕方の打合わせは綿密に行なわれ、民具担当の大上氏からは、演示解説で折り畳みシルクハットを開くのは5回が限界と言われた。幸い、2月の団体見学は1月ほど多くなかったので、すべての学校で折り畳みシルクハットを目にしてみることができた。

b. 反応

折り畳みシルクハットは、箱を見ただけでは何が入っているか想像がつかず、質問をしても色々な答えが返ってきた。くつ・はちまき・水筒・・・等などである。「これは帽子なんですよ」と言って、“ボンッ”と広げると、目を見張って静かに驚いているようだった。モンドリのときのように「なるほど～」という反応はなかったが、「あ、手品で使う帽子や」というように、認知度は高かった。

ワークブックは中身に絵を多用したので、取り組みが早かった。ただ、下駄を初めて見たという子が意外に多いことが驚きであり、ワークブック+職員の解説も必要になった。

「男の装い」でも、展示室で「さがしもの」をするというスタイルをとったため、展示室で楽しく過ごせたようである。少々動線が「仕掛けて、大漁！」よりも単純になったのが残念であった。

5. まとめ ～そして、これからの課題～

3月は、卒業式などで学校が忙しくなり、また春休みに入る直前のまとめの時期に当たるため、団体見学の申込みはなかった。しかし、1月・2月だけで数えても、3学期の団

体見学がととも増えた。平成11年度は4校であったが、12年度は11校（その内ワークブックの利用があったのは10校）であった。小学校3年生向けプログラム効果もあってのことだと考えられる。特に第一期の「仕掛けて、大漁！」は、多くの学校に利用してもらうことができた。第二期の「男の装い」は、時期的なものもあり多くの利用はなかったが、楽しく展示を見て帰ってもらうことができた。

企画陳列に伴う今回のプログラムは、大変好評裡に終えることができた。次の課題は、企画陳列だけでなく、常設展示でどのように取り入れていくかということになる。

常設展示は企画陳列よりもテーマが広がるため、問題の作り方が散漫になるのではないかという問題点が出てくる。しかし、1年の大部分が常設展示であることと、常設展示は西宮の歴史と文化を広く知ることができるように設定してあることから、これを上手にプログラム化できれば、さらに郷土資料館への学校側の興味・利用希望が増えるであろうと考えられる。

平成13年度に入り、常設展示に即したワークブックの第1弾を作成した。今後、第2弾・第3弾と作成し、常に新鮮なプログラムを用意して、団体見学を受け入れていきたいと考えている。

- (1) 合田茂伸 1996年「郷土資料館の企画陳列」『西宮市立郷土資料館ニュース』第19号

目次 CONTENTS

当館収蔵古文書の利用状況… 1

さがしものたびにでよう（下）… 4

西宮市立郷土資料館ニュース第29号 2002年8月10日